

PENDING MACHINE

第7期 OB 諸角 陽太

3月17日のことである。戸建訪問の営業中、喉が渇き自販機に歩を進めた。ここ最近目にするようになった、『全品100円』の自販機だ。缶コーヒーを見つめ、1,000円を投入し、ボタンを押した。

ゴトン。チャリンチャリンチャリン。

長きストーリーはこの擬音から始まった。

缶コーヒーを手にし、その後おもむろに釣銭をとった。

「…ん、え？」

880円。

おかしい。全品100円の自販機に僕は確かに1,000円を投入した。客観的に考え、900円の釣銭が頂けて足りないはずである。それが、880円。

20円の損失はそこまで大きくは感じない。しかしここは営業エリア。以後この地域に住む子供たちが、お年玉を握りしめこの自販機に駆け寄り、同じ思いをしたら…。少し悩んだ末、正義のために自販機の会社、株式会社Yに連絡することにした。

株式会社Y「お電話ありがとうございます。株式会社Yでございます。」

諸角「いつもお世話になっております。いや、今ですね、〇〇町の御社の100円自販機で缶コーヒーを買いましたところ、1,000円入れたのに880円しか出てこなかったんですよ。」

株式会社Y「あ、さようでございますか。大変失礼いたしました。」

諸角「いや、それほど失礼でもないんですけど。で、とりあえずお金は別にいいので、近々修理したほうがいいと思いますよ。」

株式会社Y「はい、至急管理の者を向かわせます。失礼ですが、お客様のお名前を伺えますか？」

100点満点な言葉遣いと気配りを見せる株式会社Yの女性オペレーター。名前や連絡先をとりあえず伝える。

諸角「では、宜しく願いいたします。」

株式会社Y「あのお客様！この度ご不便をおかけしてすみません。是非、20円の返金をさせていただきます。」

諸角「いえ、いいですよ、20円ですし。仕事もありますから。」

株式会社Y「いえ、是非返金させていただきます。」

なぜそこまで。

諸角「いや、でも仕事があるので。すみません。」

株式会社 Y 「では…郵便為替で郵送させてください。」

諸角 「…え、20 円をですか？」

株式会社 Y 「はい。」

なぜそこまで。

諸角 「…やっぱいいです。」

株式会社 Y 「いえ、是非住所を教えてください。」

恐るべき、押しつけがましいお客様目線。会社本位のお客様満足度の迫及。

オペレーターの熱意と熱さと暑苦しさと厚かましさに負け、住所を伝えた。その日はそれ以降、ずっと家族にこの事情をどう言い訳をしようかと思案して終わった。

翌々日、株式会社 Y から早くも封書が送られてきた。驚異の対応の早さである。封書の中には郵便為替と、ご丁寧に添え書きがあった。

『拝啓 毎度お引き立てを賜りまして厚く御礼申し上げます。この度は大変ご迷惑をおかけいたしまして申し訳ございませんでした。代金を送付させて頂きますのでご査証くださいませ。尚 今後ともご愛顧の程よろしくお願い致します。敬具』

相変わらずの完璧で大きすぎる対応に、逆に若干舐められているのではないかという一抹の不安を覚えながら、郵便為替を開いた。

「…ん、え？」

50 円。

おかしい。全品 100 円の自販機に僕は確かに 1,000 円を投入した。客観的に考え、900 円の釣銭が頂けて障りないはずである。それが、880 円。僕は指摘の一報を入れ、特別希望はしなかったが、というよりむしろこんな事態こそ最も避けたかったのだが、ともあれ差額を郵便為替で送ってもらうことにした。20 円の郵便為替が頂ければ障りないはずである。それが、50 円。

謎の 30 円追加。これはお詫びの気持ちなのか。というか、お詫びの気持ちを示すというのなら 30 円はとりようによっては失礼に値しないか。それとも返金に加え、指摘の際の電話代も加味して下さったのか。恐るべし株式会社 Y。そしてこの郵便為替を送るために封書に 60 円の切手が貼られているが、これは割に合うのか。株式会社 Y も僕も金銭的および手間的にも赤字で、ただただ郵便局が得をしたというただそれだけのことではないのか。郵便為替を送ることばかりに気をかけ、あの自販機は果たしてどなたか修理に行かれたのか。

思案の末、僕は数日後の休日。郵便局に出向くことにした。

「郵便局に郵便為替の交換に行くことの手間自体が、20 円以上のことだとは思うんだけどね。」

そう笑う僕を父が見送る。

「でもたぶん郵便為替って発行する時点で株式会社 Y が郵便局に支払っているんだろ？ 取りにいかないと、郵便局の丸儲けになるだろう。」

もういっそ、郵便局の利益にしたほうが一番有益な解決なのではないだろうかという邪念を捨て、僕は50円の郵便為替を持ち郵便局に向かった。郵便為替の現金交換は初めての体験である。局員に郵便為替を差し出す。局員が何やら入力し、とても大きな精算機が音を立てて動き出す。

チャリン。

50円玉が出てきた。50円の郵便為替を渡し精算をしてもらったら、50円が返ってきた。障りない…障りないぞ…。

「…しゃ。」

僕は小さく、つぶやいた。

渴いたのどを潤したいという小さな欲求が生んだ小さなトラブル。それが小さな迷いを生み、小さな行動に繋がり、大きな心遣いのもと、大きな困惑へと繋がって、でも今、僕は少し大人になった気がした。清々しい気持ちで、帰路に着いた。充実感。喉が渴いたので、自販機に歩を進めた。

そこには、『株式会社 Y』と書かれていた。



本文と全く関係ありませんが、著者とダンススクールの友人（左から2番目が著者）
本文と全く関係ありませんが、この日著者は、誕生日でした！